

rp'um からレファイムへ ——ヘブライ語聖書の「巨人」表象とそのイメージは どのようにして成立したのか——

高井啓介
関東学院大学

要旨

本稿は、古代都市ウガリトにおいて神的な存在を意味した「*rp'um*」が、ヘブライ語聖書の中では巨人を意味する「レファイム」として定着した経緯について考察した。

まず、第二章では、導入として、ヘブライ語聖書に登場する「巨人」の代表的存在であるバシヤンの王オグを紹介した。彼がレファイムの生き残りであるとされるエピソードを通して、レファイムが「巨人」とされることを示唆しつつも、レファイムという単語それ自体には、「巨人」を指し示すものはないことも述べた。したがって、本稿は最終的に、レファイムがなぜ「巨人」になったかについて考えることになる。

第三章で、ヘブライ語聖書に記されたレファイムの語を、死せるレファイム（地下冥界に住む亡霊）と、生けるレファイム（巨人族）に分類した。前者は、神によって滅ぼされた特定の集団であるとされ、冥界の最も深く暗い場所の住人を意味する象徴的な表現としても用いられる。後者は、ヨルダン川東岸のバシヤンなどの地に生息し、アブラハムやモーセによって滅ぼされた巨人族である。

続く第四章において、レファイムと関連があるとされてきたウガリトの *rp'um* について、ウガリトのテキストを分析しながらその属性を分析した。レファイムの原型とされるウガリトの *rp'um* は、神格化された生ける英雄や王であり、死後は王権の権威を強化するための儀礼的役割を与えられていたことも指摘した。

第五章以下では、*rp'um* がヘブライ語聖書では負のイメージをまとった巨人となった理由と意味について考えた。イスラエルの伝承において巨人は元来、恐怖をもたらす敵であり彼らの討伐が勝利の象徴として描かれていたこと、また、イスラエルは、人間の神格化を否定する一神教に基づき、自らを神格化する外国の王を非難していたことが背景事情として挙げられる。以上を踏まえ、イスラエルにおいては、レファイムが元来の意味で肯定されることはあり得ず、むしろ、否定され滅ぼされるべき大きな敵、すなわち巨人として認識されたと考えられると結論付けた。

キーワード

レファイム、*rp'um*、巨人、イスラエル、ウガリト

From *rp'um* to Rephaim: How did the Representation and Image of “Giants” in the Hebrew Bible Come about?

Keisuke TAKAI
Kanto Gakuin University

Abstract:

This paper considers how “*rp'um*”, which means divine existence in the ancient city of Ugarit, became established as “Rephaim”, which means giant in the Hebrew Bible.

First, in Chapter 2, as an introduction, I introduced Og, King of Bashan, who is a representative of the “giants” that appear in the Hebrew Bible. Through the episode in which he was allegedly a survivor of Rephaim, I suggested that Rephaim was considered a “giant,” but also stated that the word Rephaim itself had no indication of “giant.” Therefore, this article eventually considers why Rephaim became a “giant”.

In Chapter 3, the words of Rephaim in the Hebrew Bible were classified into dead Rephaim (ghosts living in the underground underworld) and living Rephaim (giants). The former is said to be a specific group destroyed by God, and is also used as a symbolic expression to mean the inhabitants of the deepest and darkest parts of the underworld. The latter is a giant tribe that inhabits areas such as Bashan on the eastern bank of the Jordan River and was destroyed by Abraham and Moses.

In the following Chapter 4, Ugarit's *rp'um*, which has been considered to be related to Rephaim, was analyzed for its attributes by analyzing the Ugarit text. I pointed out that Ugarit's *rp'um*, the prototype of Rephaim, was a deified living hero and king, and was given a ceremonial role after his death to strengthen the authority of the kingship.

In Chapters 5 and 6, I considered the reason why and the meaning of which *rp'um* became a giant with a negative image in the Hebrew Bible. In Israelite tradition, giants were originally depicted as horrifying enemies and their subjugation as a symbol of victory. Also, Israel was blaming foreign kings for deifying themselves on the basis of monotheism, which denies the deification of humans.

Based on the above, I concluded that in Israel, Rephaim could not be affirmed in the original sense, but rather was recognized as a giant, a great enemy, to be denied and destroyed.

Keywords: Rephaim, *rp'um*, Giants, Ancient Israel, Ugarit

1. はじめに

私たちの神、主よ。あなた以外の多くの君主が私たちを治めました。
私たちはただあなただけを、あなたの御名を呼び求めます。
彼らは死人であって、生き返りません。
彼らは死者の霊（レファイム רִפְאִיִּם）であって、よみがえりません。
それゆえ、あなたは彼らを罰して根絶やしにし、
彼らについての記憶をすべて消し去られました。

これは、ヘブライ語聖書イザヤ書 26 章 13–14 節の引用である。このイザヤの預言の文言の通りに、レファイムの記憶は消し去られて、それがもともと何を意味したのか、そしてそれがどこから来たのかが現代のわれわれには見えにくくなってしまっている。レファイムが「死者の霊」であるのは、その語が持つ一つの意味にすぎない。レファイムは、このほかにも地理的名称（「レファイムの谷」、「レファイムの地」）として現れ、そして何よりも「巨人」との結びつきが際立っている。本稿は、ヘブライ語聖書における「巨人」伝承の一角にレファイムをめぐる伝承があることを指摘し、その伝承成立をめぐる問題について考察する。

2. オグと「巨人」

ヘブライ語聖書に登場する「巨人」として名を知られる人物がバシヤンの王オグである。オグはのちのイスラーム世界ではウージュ（Uj）と呼ばれ、甚だしく巨体であるその存在が描かれた図像が残る。本シンポジウムのフライヤーにある巨人の図像もこのオグ／Uj が使われている。ということで、本稿の出発点をこのオグに定めたい。

オグが「巨人」であったことは、ラバ（現在のアンマン）にあったとされるオグの「鉄の寝台」のサイズ（長さ9キュビト（406cm）、幅4キュビト（176cm））によって想定される。申命記には、「見よ。彼の寝台は鉄の寝台で、それはアンモン人のラバにあるではないか。その長さは基準のキュビトで九キュビト、その幅は四キュビトである。」（3:11）と記されている。この寝台を日常的に使用していたと考えるならばオグの体軀は極めて巨大であったことになろう¹。

このオグ²に我々は民数記 21 章において初めて出会う。モーセが率いるイスラエルはヨルダン川東岸（トランスヨルダン）を進み、アモリ人の王シホンの領地に至ってそこを通過することを拒否されたため、彼らに戦いを挑み勝利しその町々を占領したと記述されている（21–32 節）。引き続いてイスラエルの民が対峙したのがシホンの領域の北側に位

置する地域バシヤンの支配者であったオグである。オグはこの一団を迎撃するためにエドレイまで進軍してそこで戦闘準備を整えた(33-34節)。申命記は、民数記の伝承をほぼ逐語的に引用しつつも、視点を3人称から1人称へ変えてオグの物語を再提示した(3章1-2節)。続く部分(4-10節)において、申命記記者は民数記の記事を下敷きにしながらかも、その資料を拡張しむしろ誇張しつつ、バシヤンに対するモーセの完膚なきまでの勝利の記事を演出している。オグについては、申命記の冒頭部分に、アシュタロテに住んでいたとの記述がある(1章4節)。申命記記者はオグを「レファイムの生き残り」ととし、両者の結びつきに初めて言及する。上記の誇張部分を締めくくる3章11節に次のように書かれている。

バシヤンの王オグはレファイムの唯一の生き残りであった³。

オグがレファイムの生き残りであるというのは、おそらく、「レファイム人」がアシュテロト・カルナインにおいてエラムの王ケドルラオメルとその同盟の王たちによって撃ち滅ばされたとの創世記14章5節の記事を踏まえているものと思われる。その戦いを生き延びたレファイム人の子孫がオグに当たるということであろう。ということは、オグがその生き残りであるとされるレファイムは「巨人」あるいは「巨人族」であることになる。アシュテロト・カルナインと結びついていたレファイム人の子孫であるとされるこのオグが「アシュタロトとエドレイに居を構え」(ヨシ12:4; 13:12)、その支配はバシヤン全域を越えてギレアドの半分に及ぶとするならば、「巨人」「巨人族」はバシヤン地方を含むヨルダン川東岸地域と深い結びつきを持っていることになろう。この点はまた後に触れる。

ところで、レファイムは語源的には「巨人」を示すものといかなるつながりもない。レファイムはオグの体躯の巨大さを通して「巨人」となったのである。もしそうであるならば、なにゆえにレファイムは「巨人」になったのであろうか。すなわちレファイムの「巨人」表象はいかにして成立したのであろうか。本論文はこれらの問いに一定の回答を与えていくことになるのではあるが、最初の手続きとして、次章ではヘブライ語聖書における「レファイム」の意味の広がりについて確認しておくことにしよう。

3. ヘブライ語聖書におけるレファイム

3-1. 死せるレファイム——死霊として

ヘブライ語聖書のレファイムは第一に、そして何よりも死者あるいは死霊として知られる。レファイムは「下界の」(イザ14:9)「シェオル(陰府)の深み」(箴9:18)に居る。レファイムの住まうその場所は、大洋の水底のさらにその下に位置するが、その場所にまで及ぶ神の力からレファイムは逃れることができない(ヨブ26:5-6⁴)。レファイム

が複数名詞であることからわかるように、それは集団性・集合性が意識される存在である（「レファイムの集会」(箴 21:16)）。レファイムが死者と考えられるのは、死者を直接的に意味するメティムと並行法的に対応するからである（詩 88:11⁵、イザ 26:14⁶）。詩編 88 編においては、レファイムは冥界にいる死者のなかで最も悲惨な状態にある者のイメージをもって描写される⁷。一方で、イザヤ 14 章 9 節に言及されるレファイムは死せる王として提示されている⁸。イザヤの預言に言及されるこの死せる王はバビロンの王である。バビロンによる支配が終焉を迎えるとき、神がバビロン王を冥界に送る許可を与え、地下冥界ではそこに先住する諸国の王たちの亡霊がバビロン王を迎えるために目覚めて待機するとともに、バビロン王に冥界において死者は無力であることを告げる役割を負う。死せるレファイムはしかしながらいかなる意味においても巨人表象とは結びついていない。

3-2. 生けるレファイム——「巨人」である個人、あるいは「巨人族」である集団として

レファイムが生きる人を意味する場合には二つの異なる伝統がある。第一の伝統として、ヨルダン川より西に位置するレファイムがいる。その一個人名としては、ゴリアテが最も名の知られた存在であろう。サムエル記上 17 章には、ゴリアテがペリシテ人の勇士であり、少年時代のダビデが投石機を使ってその額を石で打ち抜き、彼自身より遥かに体躯も体力も上回るこの人物を一撃のもとに打倒したことが語られており、この業績によりダビデの名声は極めて高いものとなった。このゴリアテの体躯の並外れた大きさについては、その身長が 6 アンマ半（約 2.9 メートル）あるといわれている。また彼が武装していた鎧の重量は 600 シェケルあったと伝えられており、この重量の鎧を支える体躯はまさに巨人のそれであったといえる。ペリシテの戦士イシュビ・ベノブもダビデと対峙しその将軍アビシャイによって討伐されることになるが（サム下 21:15-16）、彼の武具である槍の重量が青銅 300 シェケルあったとされ、そのような槍を扱うことができる人間はその体躯の大きさが想定されることは当然であろう。さらには、サフ（サム下 21:18）や、手足の指が各六本ずつあわせて二十四本ある戦士（サム下 21:20）もまたダビデとその家臣の兵士たちにより倒されることになるが、これらの人物を申命記史書は「ラファの子孫」(*yelide harapa'*) と呼ぶ。並行記事である歴代誌上 20 章 4 節では「レファイムの子孫」(*yelide harepha'im*) に置き換えられている。通常「子孫」と訳される *yelide*(*yalid*) の解釈には議論があるが、いずれにせよ、このフレーズが「レファイム」との関係を持つことは否定し難い⁹。このレファイム、すなわちヨルダン川より西側に展開したレファイムは、レファイムの谷 (ים־רפאים¹⁰) という地理的名称と分かちがたく結びついている。ヨシュア記における二通りの記述 (15:8; 18:16) はユダ部族とベニヤミン部族の正確な境界線を描写した長い記述の一部にあたるが、それによればレファイムの谷は、エルサレム

の南西に位置し、ベニヤミンとユダの領域の境界を画するのはその北側の一部である。ヨセフスの記述によれば、『谷は広く、ベツレヘムに向かって伸びている』¹¹。その南西側の端で谷はソレク川の支流に向かって開かれており、ソレク川それ自体はペリシテ人の地に向かって西に流れ込む。このようにレファイムの谷はペリシテ人の支配領域に近接した地域に位置するため、統一王国時代以降にはイスラエルとペリシテ人との戦闘の舞台として頻繁に登場するようになる¹²。とくに戦闘の場面においてペリシテの勇士が巨体を持つとして巨人のイメージと結びつくことがあることから、ペリシテ人をヨルダン川より西に位置する巨人としてのレファイムとして理解する伝統があった可能性がある。ギリシア語聖書七十人訳 (LXX) は、「ラファイムの谷」と訳すほかに、「巨人たち (ギガントーン) の谷」、「タイタンズ (ティタノーン) の谷」との訳を施しており、ここにも「レファイム＝巨人」伝承の反映がみてとれる。

第二の伝統として、ヨルダン川より東に位置するレファイムがいる。「レファイム人」と集団として認識されるこの人々は、ヨルダン川東岸のバシャン (アシュタロテ、エドレイ)、モアブ、アモンに展開し、彼らがそこに住む地は「レファイムの地、国」(申 3:13) と呼ばれている。このレファイムは、最初にアブラハムによって (創 14:5-6)、そして最終的にはモーセ (申 2:9-12, 18-22; 3:8-14) によって滅ぼされたとされる。その生き残りがオグの伝統につながる。創世記 14 章の記事はアブラハムを英雄として描写しようとする意図があり、レファイムはこの物語のなかでは受動的な役割を持つにすぎない。レファイムは東の王たちの同盟軍によって攻撃されアシュタロテ・カルナイムで敗北した。アシュタロテ (およびエドレイ) はヨシ 12:4 や 13:12 においてレファイム (の生き残り) と結びつけられている。創世記では、レファイム人のほかにズジム人、エミム人への言及があるが、申命記の伝統は、ザムズミム人 (ズジム人) (申 2:20) とエミム人 (申 2:11) をレファイム人の別の呼称と理解している。ザムズミム人 (ズジム人) とエミム人については、「アナク人のように大きくて背の高い民」であると明記されるが、レファイム人が「巨人族」であるのはあくまでも間接的証拠による。レファイム人がこれら二つの集団と共通の文脈でとりあげられていること、レファイムの生き残りであるオグの体躯が巨大であったことがその寝台のサイズから推測されること、そして何よりも LXX がこの語を「γίγαντες (ギガントス)」(創 14:5; ヨシ 12:4; 13:12) と訳すからである。レファイム人、ザムズミム人、エミム人は、戦士アブラ (ハ) ムの戦闘力の強さを際立たせる役割を持つ。東の王たちは、「巨人」であるカナンの人々を打ち破るほど強力である。アブラハムは「巨人」を打ち破るそれらの東の王たちを撃破するほど強い。生けるレファイムはイスラエルによって打ち破られ、根絶され、ヨシュア記 (12:4; 13:12) の中の記述をもってこの伝統は終わりを迎える。

3-3. ネフィリム、アナキームそしてレファイム——「巨人（族）」の系譜

原初史を物語として描いた創世記6章には、地上に人が増え始め、多くの未婚の女性たちが存在するようになったとき、神の子らが彼女たちの美しさを見初めて、おのおの好ましい女性と妻にしたとの記述がある(1-2節)。その結果として、神の子らと人間の娘たちの間に生まれた存在が「ネフィリム (נְפִילִים)」と呼ばれている。ネフィリムは、おそらくヘブライ語の動詞ナーファル (נָפַל) から派生した語であり、そうであるならば、「(天上から)落ちてきた者たち」との意味が含まれている。ここでは「神々の子ら」が何を意味するものであってもよい。天上の神々の子らが地上に降りてきて人間の集団ネフィリムとして存在した状況が語られていることは洪水伝承以前の神話的時代においては理解できないことではない。このネフィリムへの言及はヘブライ語聖書のなかでもう一箇所民数記13章32-33節にある。ヨシュアとカレブと共にカナンを偵察の目的で行き巡った人々は、カデシュに滞在していたモーセのもとに戻り、自分たちが行き巡ったカナンの地で見た民はみな背が高い者たちであったと報告した(32節)。その背の高い者たちがネフィリム人と呼ばれる。またネフィリム人からアナク人(アナキーム)が出たと理解している発言もある(33節)。神と人間の結合によって生じたという神話的起源をもちながらも洪水によって地上から根絶されたネフィリムと、洪水以後イスラエルのいわゆる土地取得以前にカナンに展開したアナキーム(アナク人、その他ザムズミム人、エミム人)が、そしてこのアナキームと、ザムズミム人とエミム人とも呼ばれるレファイムが「巨人」という媒介項をもって関連付けられることになる。そうすることによって、ネフィリムが神的起源を持つのみならず体躯の大きさを備えるようになる。LXXは創世記と民数記双方のネフィリムを「γίγαντες(ギガンテス)」と訳し、このギガンテスの性質の理解によりネフィリムが「巨人」であるという表象が完全に定着することになる。

3-4. ヘブライ語聖書のレファイム像

ヘブライ語聖書に登場するレファイムはすべて殺される運命にあるか(生けるレファイム)、すでに死んだ者である(死せるレファイム)。前者の生けるレファイムは、戦士の個人でも集団でもあり、また巨人としても理解されるが、ヨルダン川の東にも西にも、異なる民族集団のなかに見いだされる。西の伝統は「レファイムの谷」、東の伝統は「レファイムの地」という地理的名称としても足跡を残している。ここでは、戦士であり英雄であるものが巨人として理解されるのはなぜかということが問われなければならない。

一方で、後者の死せるレファイムは、生存していたことのある特定の集団であると考えられ、地下冥界の最も深く最も暗いところの住人を象徴的に表現している。本論文の冒頭で述べたように、死せるレファイムは神によって滅ぼされその記憶は神によって消し去られる運命にある(イザ26:14-19)。一方で、死せるレファイムの王権との結びつきはイ

ザヤ書 14 章 9 節において最も顕著である。われわれは続くウガリトの *rp'um* の分析において、この王権とレファイムとの結びつきの理由の一端を知ることになる。

4. レファイムと *rp'um*

ところで、ヘブライ語聖書のレファイムが、1928 年のラス・シャムラの発掘によるシリア北部地中海岸の都市国家ウガリトの発見以来、語源的にウガリト出土文書のなかに言及される *rp'um* という語彙に由来することはすでによく知られている。本章では、ウガリト文書のなかに *rp'um* が言及される箇所を探すとともに、まずウガリトのコンテクストにおいて *rp'um* がどのような意味を持ちどのような存在として登場しているのかを見ていくことにする。

4-1. ウガリト王家の死者儀礼 (KTU¹³1.161: 4¹⁴, 5¹⁵, 8¹⁶, 9¹⁷, 24¹⁸)

rp'um は KTU1.161 (RS 36.126) における言及が最も注目を集めてきており、重要性が高いために、まずこのテキストにおいて *rp'um* がどのような存在であるかを確認していこう¹⁹。

KTU1.161 は、死んだばかりの王のための葬送儀礼を記述した文書である。その儀礼は、王の葬送の手続きに加えて、新王の即位を記念し祝福するための儀礼行為を含んでいる。テキストはウガリト王国最後の王アンムラピ ('*Ammurapi*) 3 世 (在位紀元前 1225/1220–1215 年) の即位式の直後に記されたと思われる。この直前にアンムラピの父であったニクマド (*Niqmaddu*) 3 世が崩御しており、その死後、そして新王の即位後ほどなくこの儀礼が行われたと思われる。先王ニクマドの死が嘆かれるだけでなく、新王アンムラピの即位が祝福される。儀礼の手続きのなかで、新王を祝福し旧王の死を嘆く役割を演じるために、すでに死んでいる王家の祖先である *rp'um* が、これから *rp'um* となるニクマドのために死者世界より召喚される。王家の祖先である *rp'um* の具体的な名への言及が 3～7 行目にある。'Ulkn, Trmn, Sdn-w-Rdn, Tr-'llmn という名前がそこに列挙されている。彼らが冥界の *rp'um* (9 行目: *rp'i 'ars*) であると考えてよいだろう。冥界の *rp'um* は「ディダヌの集まり (10 行目: *qbs ddn*)」と並行法的に使われる。ディダヌはおそらくウガリト王家の有名な名祖であり、この一対のフレーズ (word-pair) が、ウガリト王家と *rp'um* を結び付ける役割を果たしている。現在のウガリト王家／王が王家の神話的過去と結びつき、神話的起源を持つ、すなわち神々に由来するものとなる。神話と歴史が葬送儀礼を通してウガリト王家の繁栄のために結び付けられる²⁰。

このテキストにおける *rp'um* は明らかに王家の死んだ祖先である。KTU1.161 は、ウガリト文書のなかで *rp'um* が死者として言及される唯一のものである。ただし、以下で見ていくように、王は死んで初めて *rp'um* になるのではなく、生前からすでに *rp'um* で

あることを忘れてはならない²¹。

4-2. 新王即位の歌 (KTU1.108:1²², 19²³, 21²⁴, 23-24²⁵)

KTU1.108 は、新しく即位した王を讃える歌であると考えられている。21-22 行目には、「ラパウ、永遠の王 (*rp'u. mlk. 'lm*)」と言う表現があり、これは文脈から理解するに王を指した表現であると考えられ、ここにおいても *rp'um* と王権の概念が結びついている。さらに、KTU1.161 と同様、この讃歌においても、新王が冥界の *rp'um* (*rp'i 'ars*) によって権威を強化されるという構図が読み取れる²⁶。すなわち、23-26 行目に「あなたの強さ、あなたの力、あなたの主権、あなたの輝きは、ウガリトのただなかで、冥界の *rp'um* に属するものである。」というフレーズがある。この新王の即位を祝う歌において、*rp'um* は、冥界にいる王家の祖先のみならず、現世を支配する王の称号でもある。

4-3. *rp'um* テキスト (KTU1.20-1.22)²⁷

rp'um の名を冠して呼ばれるこのテキストにおいて、*rp'um* は *'ilnym* と並行法的な対語関係 (word-pair) にある²⁸。この対語関係はそもそもバアル・サイクルにおいて確認されるものである (KTU1.6 VI 45-47: *špš rp'im. thtk / špš. thtk. 'ilnym*²⁹)。'ilnym はバアル・サイクルや *rp'um* テキストのような神話的文脈のみで現れ、神的とみなされる存在であるから、対語関係にある *rp'um* にも神的性質があると考えてよい。本テキストにおける *rp'um* が死者性を意味することはない。この神話では、食し、飲み、活動的な生き生きとした *rp'um* の描写に満ちている。人生の絶頂期にある、すなわち勇敢な戦士、神的ともみなされる不死性を持たない英雄、などとしてこの神話は *rp'um* を提示している。

より詳細にみていくと、KTU1.20 II では、宮殿に招待された *rp'um* が三日かけて戦車に乗って到着し、7、8 人の集団で飲食をし、饗宴に興じている。戦車に乗ることから推測されるように *rp'um* は戦士の役割を持つ。*rp'um* は「神である者たち」「神々」と呼ばれると同時に、「英雄」「人間」とも呼ばれており、神性と人性の両方を兼ね備えた存在であると考えられよう。*rp'um* のなかの一人としてダンイルの名が、「ダンイル、*rp'um* の人／勇者 (*dn'il. mt. rp'i*)」(II.7-8) というフレーズで登場する。このダンイルは、アクハト叙事詩 (KTU1.17-1.19) においてアクハトの父として登場する有名な英雄である³⁰。ヘブライ語聖書のなかに言及される存在でもあり、*rp'um* とレファイムをつなぐ鍵の一つでもあるが、これについては後述する。

4-4. キルタ (とくに KTU 1.15 III 2-15)

いわゆるキルタ叙事詩は書記イリミルクの署名がある文書の一つで、三つの粘土板

(KTU1.14; KTU 1.15; KTU1.16) からなる物語である。この物語の設定は、*Hbr* (フブル) を支配する王キルタが、妻たちが亡くなり後継者もなく、このままでは王朝が終焉することを憂えていたときに、イル神より、軍隊を率いて *'Udum* (ウドウム) に攻め入り、王女 *Hry* を妻にせよとの神託を受け、ウドウムに進軍することにある。キルタは、*rp'i arš* (「地の *rp'um*」) のなかで高められよ (KTU 1.15 III 2–41, 13–15) と賛美される。KTU1.161 および 1.108 とは異なり、ここでの「地」は「冥界」と理解する必要はない。キルタは *rp'um* として生前から高められるべき存在であった。キルタは自らの死後に後継者がいないことにショックを受けるように、その人間的側面が強調されているが、同時に物語の後半部においては、彼の息子は父が病気のために死ぬであろうことにショックを受けており、不死性という意味での神的性質を持っていることが示唆される。それに関連して、彼は「イル (神) の息子」、「親切で聖なる方の息子」というエピセツも持っている (1.16: I: 20–22)。

上記の KTU 1.15 III 2–4 および 13–15 においては、キルタが「地の *rp'um*」のなかでのみならず、「ディタヌの集まり (*qbs dtn*)」の中で高められるようにとの願いが述べられている³¹。「ディタヌの集まり」という表現は、KTU1.161 の 9–10 行目においても「冥界の *rp'um*」と対語として現れる。その箇所でもすでに述べたように、ディタヌ/ディタヌは、重要な王家の父祖であるのみならず、「ウガリト王家の創始者」である可能性もある。この名祖がアムル系の帝国アッシリア王家とバビロニア王家の系譜である AKL (アッシリア王名リスト)³² および GHD (ハンムラビ王朝の系図)³³ にも登場することがそのように推測される理由である。おそらくディタヌは紀元前 3 千年紀のシリアのアムル系の遊牧部族の支配者であった³⁴。アッシリア、バビロニアとウガリトの王朝はみなこの部族を起源としている。ディタヌはキルタと *rp'um* を結び付ける。

4-5. ウガリトの *rp'um*

ウガリトのテキストに言及される *rp'um* の様相をここでまとめておこう。書記イリミルクによって紀元前 14 世紀に記述されたテキスト群においては、*rp'um* は、生ける王、指導者、戦士であり、好意をもって描写されている。キルタやアクハトでは、*rp'um* は戦車に乗る英雄として登場する。集合的な *rp'um* の描写もあり (*rp'i arš*)、即位式の饗宴 (KTU1.20–1.22, KTU1.108)、誕生 (キルタ) の際に集団で集められる。*rp'um* は神的であるが、半神的 (*demigod*) であって十全な意味での神ではない。彼らは、神々の子らであり、それゆえに地を支配し審判する権能を持つ。*rp'um* は生前から神性を持つ。すなわち、すべての *rp'um* は、生死にかかわらず、神々に起源を持つ。すべての王は、その生死にかかわらず、*rp'um* である。しかし、すべての *rp'um* が王というわけではない。

rp'um はその死後、冥界で特別な地位を得る。死後の *rp'um* については、ウガリト王家の祖先儀礼を記述した KTU1.161 が詳細に語っているが、いにしへの *rp'um* である王

家の祖先と最近 *rp'um* の一員になった王家の祖先が共に、直近で死亡した王ニクマドおよびその治世の榮譽をたたえるために召喚される。すなわち *rp'um* は死後に王家の権威を強化する権能を持つ存在として認識されていたことがわかる。死せる *rp'um* の根本的機能としては、王座にある者や軍を率いる者に関して、それが誰であれ、神話的過去、すなわちこの世界の不死性を持たなくなった最初の「神々の子ら」と結び付けることで、それらの者たちを正当化し神格化しうるものであった³⁵。あくまでも *rp'um* は本来的には生きた存在であり、死後に死者としての *rp'um* になるに過ぎない。

ウガリトの *rp'um* には巨人としての性質はない。*rp'um* とレファイムは関連する言葉ではあるが、ヘブライ語聖書の巨人のオリジナル（の物語）はウガリトにはない。ヘブライ語聖書はウガリトから巨人譚を引っ張って来たのではない。それではなぜ *rp'um* を引き継いだレファイムは巨人になったのであろうか。その問いに対する解答を考える前に、*rp'um* / レファイム伝承がいつどこで成立したのかについてまずは考えておきたい。

5. レファイム / *rp'um* 伝承はいつどこで生まれたのか

それでは、レファイム / *rp'um* 伝承はどこでそしていつ頃生まれたのだろうか。時期としては、ウガリトでは紀元前2千年紀中頃にはすでに根を張っているのも、それより以前であろう。ヘブライ語聖書のレファイム伝承成立の地域としては、カナン、ペリシテ人の植民都市、ユダ、アンモン、モアブ、バシヤン、レバノン、シドン、ティルス、ウガリトなどに可能性がある。以上の全ての地域にレファイム / *rp'um* が足跡を残している。

このなかで、伝承成立の場所としてはバシヤンが最も蓋然性が高い。新王即位の歌 (KTU1.108:2-3) には、アシュタロテ (*ttrt*) とエドレイ (*hdr'y*) に住むイル神が新王の即位を承認するとの記述がある。

<i>'il. ytb. b' ttrt</i>	イルはアシュタロテに座し
<i>['i]l tpr. bhdr'y</i>	イルはエドレイで統治する

イル神の子とされる *rp'um* もそうであったであろう。アシュタロテとエドレイが位置するバシヤン地域は、ヘブライ語聖書においても、ヘブライの神がシオンより前に住んだ場所との言及がある（詩 68:15-16³⁶）。ヘブライ語聖書において、レファイムが最初に登場するのがバシヤン（創 14:5）である。また、バシヤンには「レファイムの地」と呼ばれる地域がある。*rp'um* テキスト (KTU1.22 I 19-26) においては饗宴のために *rp'um* が集合する場所はレバノンである。レバノンとバシヤンは、アンチ・レバノン山脈をはさんで向かい合う。ヘブライ語聖書の預言者文学（イザ 2:12-16、エレ 2:20-23、ナホ 1:4）のなかでレバノンはバシヤンとたびたび並行法的に言及される。レファイム

／*rp'um* は集団としてディタヌ／ディダヌと起源的に結び付けられるが、このディタヌ／ディダヌは、上述のようにおそらく紀元前3千年紀にシリアのいずれかの地域に生きて遊牧の人であったであろうが、この地域がバシヤン地方ではなかったかとの指摘もある³⁷。

以上のような状況証拠から、レファイム／*rp'um* の概念はセムの起源を持つ民族によっておそらくバシヤンにその位置を与えられたのではないかと考えられる。たとえば、*rp'um* の一人であるダンイルはアクハト叙事詩の英雄であると同時に、聖書においてもエゼキエルの預言(14:12-20)において賞賛される(ノアとダンイル(聖書翻訳はダニエル)とヨブ)。エゼキエルがフェニキア(ティルス)の君主に言及する際(28:1-3)にもダンイルが比較の対象となり、このダンイルはウガリトとフェニキアとイスラエルにおいて共有されている伝承であろう。これらの国々の王権はレファイムとのつながりを認識しており、このつながりこそが、神と人とのつながりを意識させるものであった³⁸。

6. なぜレファイムは「巨人」になったのか

レファイム／*rp'um* 概念とその物語を受容したウガリトとイスラエルは共通の考え方を持っていた。いずれの社会でも、王権と王、その父祖と子らは、自らがレファイム／*rp'um* であった支配者たちとの直接的な結びつきを有することを認識していた。ウガリトでは、その生死を問わずすべての *rp'um* が新王即位を祝うために集合させられる(KTU1.161)が、それらの *rp'um* はディタヌという名祖を共に持つ。この王家の名祖ディタヌをキルタも *rp'um* と共有する(KTU1.15)。イスラエルにおいては、バシヤンの王オグがレファイムの生き残り(申3:11)とされるし、イザヤ14:9のようにレファイムが指導者、過去の王たちと関係づけられる場合がある。英雄であり戦士であることは、力強さを表現しており、そのような者の一人であることと、そのような者を打ち負かすこととの両方が賞賛される。ウガリトではアクハト、キルタ、*rp'um* テキストにそのような描写があり、KTU4.69では戦士や将軍が *rp'um* であることが明確に表現されている。イスラエルではレファイムが強力な戦士であると考えられていたことはこれまでに見てきた(創6:1-4、サム下21:15-22、歴上20:4-8)。

しかしながら、両者の相違点も大きい。イスラエルにおいてレファイムは高次の人間存在ではない。全存在のなかで最も悪い者、恐怖を引き起こす存在、子供を脅かす存在、冥界の最も深く最も暗い場所に息づく者として記述される。ウガリト(KTU 1.161)においては、死後 *rp'um* の仲間に加えられることは祝福であるが、イスラエル(箴2:18、9:18、12:16)においては、死者としてのレファイムは完全な呪いとなる。

生けるレファイムはイスラエルにおいて「巨人」とされる。この「巨人」伝承はヘブライ語聖書のカナン征服伝承に不可欠な要素である。これまですでに見てきたように、聖

書は様々な場所に散らばる形で、巨人の存在を語っている（ヘブロン³⁹、ユダ⁴⁰、デビル、ガザ、ガテ、アシュケロン）。これらの箇所、巨人であるアナク人はイスラエルの敵として登場する。このほかアムル人、ペリシテ人が巨人と呼ばれ、「非常に大きい」⁴¹とされている。巨人は過大な恐怖をもたらす存在である一方で、一旦打ち負かすことができれば、勝利の象徴、勝者のスキルを雄弁に示すものとなる。一方で、ウガリトの *rp'um* には巨人としての性質はない。*rp'um* とレファイムは関連する言葉ではあるが、ヘブライ語聖書の巨人のオリジナル（の物語）をウガリトに探し求めることはできない。それではなぜウガリトの *rp'um* がヘブライ語聖書のレファイムにおいては「巨人」という性質を持つようになったのであろうか。

ヘブライ語聖書は、その強さと神に近い存在（半神的）として知られていたレファイム／*rp'um* に巨人の性格を付与することでその存在を悪者化した。全てのレファイムが巨人であり、巨人はすべてレファイムであるとの印象が読者に植え付けられた。悪者化されたレファイムについていえば、「明けの明星、暁の子」（イザ 14）とティルスの子（エゼ 28:1-10）に対する預言者の非難・叱責が例として挙げられよう。この両方の箇所は、人間の神性が否定される文脈にあり、レファイムが両方の箇所に言及されるのもよく理解できる。預言者は外国の王をレファイムと比べているのである。イスラエルの王は自らを神格化することはない。王が「神の子」と言われる場合があるが⁴²、それはアレゴリー的な意味に過ぎず、キルタのように「イルの子孫」として神性を主張するわけではない。人間の神格化があり得ないイスラエルの宗教においては、レファイムのウガリト的な意味での十全な展開はあり得ず、その場所はイスラエル宗教のなかにはない。イスラエルではこのようにレファイムは徹底的に否定されなければならない（cf. イザ 26:14）。

イスラエルはその一神教的性格のゆえに、ヤハウエ以外の神性の痕跡をテキストから消し去ろうとしている。ウガリトでは王としてまた戦士として特別な地位を持つ *rp'um* であるが、イスラエルのレファイムは民の敵であり、恐るべき巨大さを持ち、滅ぼされるべき存在である。外国の王で、神的起源を持つが、人間同様に不死性は持たない（イザ 14、イザ 26）との描写がある。レファイムは常に、繰り返し、ヤハウエとその民によって殺されなければならない。モーセとダビデの時代にレファイムを滅ぼしたことが後世に至るまで英雄的な行為と称賛される。聖書記者は慎重にその神性の痕跡を消し去ろうとした（創 6:1-4、ネフィリム＝レファイム伝承）。それは、レファイムが神に由来する神話的過去の記憶を意図的に消滅させるためであろうが、それは一神教的な神学においては許容できないものであったからである⁴³。レファイムとネフィリムは巨人という共通点を持つものとして恣意的に人工的に結び付けられている。神に近い存在としてのレファイムは神と人間が結び合うことによって生まれたかも知れないが、ヘブライ語聖書の一神教的傾向を持つ世界では、ウガリトのように積極的なイメージの神に近い存在はあってはならず、その神的存在は巨人となった、すなわち、レファイムの物語とネフィリムの神話、すなわち

レファイムと巨人の物語が一つになったのではないか。

7. おわりに

本稿は、古代都市ウガリトにおいて神的な存在を意味した「*rp'um*」が、ヘブライ語聖書の中では巨人を意味する「レファイム」として定着した経緯について考察した。まず、ヘブライ語聖書に記されたレファイムの語の用例は、死せるレファイム（地下冥界に住む亡霊）と、生けるレファイム（巨人族）に分類できる。前者は、神によって滅ぼされた特定の集団であるとされ、冥界の最も深く暗い場所の住人を意味する象徴的な表現としても用いられる。後者は、ヨルダン川東岸のバシヤンなどの地に生息し、アブラハムやモーセによって滅ぼされた巨人族である。一方で、レファイムの原型とされるウガリトの *rp'um* は、神格化された英雄や王であり、それが、ヘブライ語聖書では負のイメージをまとった巨人となった。その背景には、イスラエルの伝承において巨人は元来、恐怖をもたらす敵であり彼らの討伐が勝利の象徴として描かれていたこと、また、イスラエルは、人間の神格化を否定する一神教に基づき、自らを神格化する外国の王を非難していたことが挙げられる。以上を踏まえるならば、イスラエルにおいては、レファイムが元来の意味で肯定されることはあり得ず、むしろ、否定され滅ぼされるべき大きな敵、すなわち巨人として認識されたと考えられる。

レファイム（ネフィリム、アナキーム）などの「巨人」は、古代イスラエル世界において、他の集団（バシヤンの諸王国やペリシテ）との対比において自集団を、そして天上界（神々の世界）および地下冥界（死者の世界）との対比においてこの地上の世界に住む自らをみつめるきっかけとなる存在であったことは間違いがないと思う。

注

- * 本稿は、「巨人」の場（トポス）という主題のもとに行われた CISMOR（同志社一神教学際研センター）と科学研究費基盤 C「創造の業」の系譜—ユダヤ教における「自由」と「偶像」の総合的研究（研究代表者：勝又悦子、研究課題番号 20K00083）の共催で行われた 2021 年度一般公開シンポジウム（2021 年 11 月 6 日、オンラインツール zoom 使用）でのパネリストとしての報告「ラパウマからレファイムへ——ヘブライ語聖書の「巨人」表象とそのイメージはどのようにして成立したのか——」を概ね基にしつつも多少修正を加えつつ執筆を行ったものである。
- 1 Maria Lindquist, “King Og’s Iron Bed,” *The Catholic Biblical Quarterly* 73 (2011), 477–492.
 - 2 オグは、イスラエルのカナン征服伝承において、ヨルダン川東岸地域（トランスヨルダン）のバシヤン地方にあった王国の王であり、その支配領域がイスラエルによって占領され、マナセの半部族に与えられたとヘブライ語聖書のなかに繰り返し記述されている。モーセ五書：民 21:33、32:33、申 1:4、3:1–13、4:47、29:6、31:4。申命記的歴史：ヨシ 2:10、9:10、12:4、13:12 etc. 以下、聖書の各巻を略語で示す場合、すべて聖書巻末の略語の表記に従う。
 - 3 そのほか、ヨシ 12:4、13:12 にもこの内容の記述がある。
 - 4 「レファイムは、水とそこに住むものとの下にあつて震える。よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれぬ。」聖書の訳は以下すべて、新改訳（日本聖書刊行会）からのものである。レファイムはすべてそのままにして訳を反映させていない。
 - 5 「あなたは死人（メティム）のために奇しいわざを行われるのでしょうか。レファイムが起き上がって、あなたをほめたたえるのでしょうか。」
 - 6 「死人（メティム）は生き返りません。レファイムはよみがえりません。それゆえ、あなたは彼らを罰して滅ぼし、彼らについてのすべての記憶を消し去られました。」
 - 7 Jonathan Yogev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, (Leiden: Brill, 2021), 150.
 - 8 「下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき、レファイム、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を、その王座から立ち上がらせる。」
 - 9 Conrad. E. L’Heureux, “The yelidê hārāpā’: A Cultic Association of Warriors,” *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 221 (1976), 83-85.
 - 10 ヨシ 15:8; 18:16; サム下 5:18; 5:22 (代上 14:9); サム下 23:13 (代上 11:15); イザ 17:5.
 - 11 ヨセフス『ユダヤ古代誌』7.12.4.
 - 12 ダビデ王朝初期のころのペリシテとの戦闘：サム下 5:18、5:22、代上 14:9。ダビデの三勇士のエピソード：サム下 23:13、代上 11:15。
 - 13 Manfred Dietrich, Oswald Loretz, and Joaquín Sanmartín, *The Cuneiform Alphabetic Texts from Ugarit, Ras Ibn Hani and Other Places*. AOAT 360/1 (Münster: Ugarit Verlag, 2013).
 - 14 *qr’a. ’ulkn. rp[’u ...]*
 - 15 *qr’a. ’ulkn. rp[’u ...]*
 - 16 *qr’u. rp’im. qdmym [...]*

- 17 *qr'itm. rp'i. 'ars*
18 *tht. rp'im. qdmym*
19 この粘土板は1973年の発掘のシーズンに、ラス・シャムラのテルの南側の部分に位置する「ウルテヌの家」と呼ばれる場所で発見された。ウルテヌ個人の住居で発見されたことから、この人物はテキストに記述された王家の儀礼の実行に際して重要な役割を担っていたと考えられる。Cf. Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 61 n. 297.
20 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 78.
21 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 69.
22 *[hl]n. yšt. rp'u. mlk. 'lm*
23 *[...]mšk. rp'u mlk ['lm*
24 *[...]rp'i mlk 'lm. b'z / [rp'i.] mlk. 'lm.*
25 *lr / [p'i]. 'ars. 'zk.*
26 Matthew McAfee, “Rephaim, Whisperers, and the Dead in Isaiah 26:13-19: A Ugaritic Parallel,” *Journal of Biblical Literature* 135 (2016), 83.
27 いわゆる *rp'um* テキストはラス・シャムラ発掘の最初期に発見された三つの小さい粘土板 (RS 3.348, RS 2.019, RS 2.024) に記されていた。これらの文書はヴィロローによって1941年に出版された。Cf. Charles Virolleaud, “Les Rephaim. Fragments de Poèmes de Ras Shamra,” *Syria* 22 (1941), 1-30.
28 たとえば、*[...]rp'um. tdbhn [··]x'd. 'ilnym* (*rp'um* は饗宴に興じ、神である者たちは···) (KTU 1.20 I 1-2)。
29 *wy'n. dn'il [mt rp'i] ytb. gzar. mt hrnmy* (*rp'um* の人であるダンイルが語った。*Hrnmy* の人である勇者が言った。)
30 生命に満ち、子を生む能力を持つが、嫡嗣が生まれなまま死ぬことに恐怖を抱いている。アクハト叙事詩のなかにはダンイルが *rp'um* であることへの言及はない。
31 *m'id. rm. [krt] btk. rp'i 'a[rš] bphr. qbš. dtn*
32 たとえば、Graham Hagens, “The Assyrian King List and Chronology: a Critique,” *Orientalia NS* 74 (2005), 23-41.
33 たとえば、Jacob. J. Finkelstein, “The Genealogy of the Hammurapi Dynasty,” *Journal of Cuneiform Studies* 20 (1966), 95-118.
34 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 60.
35 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 97.
36 「神々しい山 バシヤンの山よ。峰を連ねた山 バシヤンの山よ。峰を連ねた山々よ。なぜ おまえたちはねたみ見るのか。神がその住まいとして望まれたあの山を。まことに主はとこしえにそこに住まわれる。」
37 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 139.
38 Jonathan Yoyev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 177.
39 「彼らは上って行ってネゲブに入り、ヘブロンまで行った。そこにはアナクの子孫であるアヒマンと、シェシャイト、タルマイがいた。ヘブロンはエジプトのツォアンより七年前に建てら

れていた」(民 13:22)。「ヘブロンの名は、かつてはキルヤテ・アルバであった。これは、アルバがアナク人の中の最も偉大な人物であったことによる。こうして、その地に戦争はやんだ」(ヨシ 14:15)。ヨシュアは自分への主の命により、エフンネの子カレブに、ユダ族の中でキルヤテ・アルバ、すなわちヘブロンを割り当て地として与えた。アルバはアナクの父である。カレブはそこからアナクの三人の息子、シェシャイ、アヒマン、タルマイを追い払った。これらはアナクの子である」(ヨシ 15:13-14)。

- 40 「そのときヨシュアは行って、アナク人を山地、ヘブロン、デビル、アナブ、ユダのすべての山地、イスラエルのすべての山地から断った。その町々とともにヨシュアは彼らを聖絶した。こうしてアナク人は、イスラエルの子らの地には残らなかった。ただガザ、ガテ、アシュドデに残るのみとなった」(ヨシ 11:21-22)。
- 41 「ただ、その地に住む民は力が強く、その町々は城壁があつて非常に大きく、そのうえ、そこでアナクの子孫を見ました」(民 13:28)。「私たちはどこへ上って行くのか。私たちの兄弟たちは、『その民は私たちよりも大きくて背が高い。町々は大きく、城壁は高く天にそびえている。しかも、そこでアナク人を見た』と言って、私たちの心を萎えさせた」(申 1:28)。「彼らは、アナク人のように大きくて背が高い民で、数も多かった。しかし主がこれを滅ぼされたので、アンモン人がこれを追い払い、彼らに代わって住んだ(申 2:21) あなたがよく知っているアナク人は、大きくて背が高い民である。あなたは「だれがアナク人に立ち向かえるだろうか」と言われるのを聞いたことがある(申 9:2)」。
- 42 「わたし(ヤハウエ)は彼(ダビデ)の父となり、彼は私の子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる」(サム下 7:14)。「私は主の定めについて語ろう。主は私に言われた。「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」(詩 2:7)。「わたしもまた彼をわたしの長子地の王たちのうちの最も高い者とする」(詩 89:27)。
- 43 Jonathan Yogev, *The Rephaim: Sons of the Gods*, p. 69.